

PREVENTION No.362

2024年2月15日開催

飲酒実態やアルコール依存に関する意識調査について 遠山 朋海(独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター)

背景

アルコール健康障害対策推進基本計画では、アルコール健康障害に関するさまざまな調査の必要性が指摘されている。COVID-19 流行や調査コストなどを考慮し、2023 年はインターネットによる WEB モニター調査となった。

方法

国民生活基礎調査等を用いて、都道府県、性別、年齢階級、飲酒経験の割合に応じてそれぞれの目標回答数を設定した。自己記入式で 40,720 回答を得た。質問項目は AUDIT、Kessler 6 scale、アルコール健康障害の認知度等を含めた。初飲年齢と習慣飲酒開始年齢が矛盾している回答等を除外し、39,081 回答を解析対象とした。

結果

女性 19,346 名の平均年齢は 48.7 歳、AUDIT 7 点以下の低リスク飲酒が 37.67%、AUDIT 8-14 点の高リスク飲酒が 4.43%、AUDIT 15 点以上のアルコール使用障害疑いが 2.05%であった。AUDIT 15 点以上の割合は 20 代と 40 代が高かった。

男性 19,735 名の平均年齢は 49.0 歳、AUDIT 7 点以下が 43.44%、AUDIT 8-14 点が 13.90%、AUDIT 15 点以上が 9.23%であった。AUDIT 15 点以上の割合は 50 代が最も高かった。また、男性は 60 歳以上でも AUDIT 8 点以上の割合が高かった。

AUDIT 15 点以上の群では 7 点以下の群と比較して、男女とも平均年齢、初飲年齢、習慣飲酒開始年齢が有意に低く、Kessler 6 scale 合計点が有意に高かった。

初飲年齢について、全世代平均では女性 19.82 歳、男性 19.25 歳であった。しかし、34 歳以下の飲酒者では女性の方が男性よりも初飲年齢が低くなっている。

習慣飲酒開始年齢について、全世代平均では女性 26.50 歳、男性 24.32 歳であった。しかし、25-44 歳の飲酒者では女性の方が男性よりも習慣飲酒開始年齢が低くなっている。

アルコール健康障害の認知度について、肝硬変の認知度は比較的高く (52.3%)、膵炎 (14.9%)、大腸がん (14.0%)、うつ病 (9.3%)、乳がん (3.5%) の認知度は低かった。

アルコール依存症のイメージとして、全体の 54.1%が「意志が弱い」に「そう思う」と回答した。

考察

女性は20代と40代、男性は50代でAUDIT15点以上の割合が比較的高く、ライフサイクル等の様々な影響が考えられる。男性では60歳以上でもAUDIT8点以上の割合が高く、高齢アルコール問題の対策も必要である。若年層の飲酒者では、女性の方が男性よりも初飲年齢と習慣飲酒開始年齢が低くなっており、これまでも予測されてきた通り、女性のアルコール関連問題が増加すると考えられる。AUDIT15点以上の群ではKessler 6 scale合計点が高く、アルコール使用障害とうつ・不安症状が合併しやすい傾向が改めて確認された。一方で、多量飲酒とうつ病の併存等の認知度は低く、アルコール健康障害について正しい知識・理解の啓発をこれまで以上に行う必要があると考えられる。

本調査はWEBモニター調査であり、これまでの訪問面接調査とは手法が異なるため単純比較はできない。AUDITはアルコール使用障害のスクリーニングテストであり、依存症の診断は医師の診察による総合的な判断が必要である。WEBモニターの中には謝礼目的で多くの調査に参加し、一つ一つの調査に労力を割こうとしないサティスファイサー（先行研究によると9～16%存在）の問題が指摘されている。今回の調査ではこのような問題への対策が行われているシステムを利用し、不適切回答は約4%であった。継続的な調査を行い、年齢、性別、社会的背景等に応じた重層的、多段階的な対策を推進する必要がある。